
カメとハル

麦子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カメとハル

【Nコード】

N96150

【作者名】

麦子

【あらすじ】

無気力男子高校生内田くんと愉快的仲間たちが、図書室の小人さんと仲良くなっていくゆるい日常のお話。内田くんと小人さんののんびりとした恋の行方も追っかけていきます。

肌寒い11月の朝。同じ制服を着た高校生たちが和気あいあいと学校までの長い坂道を歩いている。女の子たちはツンツンとする冷たい風のせいで白い頬つぺたをほんのりと赤くさせて、男の子たちは乾燥した唇を隠すようにマフラーに顔半分を埋めて大股で歩いていく。

しかしここに例外が一名。

制服のネクタイを緩く締めたまま、履き潰れたスニーカーを引き摺るようにしてのろのろと歩いているねこっ毛の髪の毛の男の子がひとり。周りの生徒たちは「さむいね」「宿題やってきた?」「忘れてた」など、友達と他愛ない会話のキャッチボールをしているというのに、ねこっ毛の男の子は黙々と熱心に、本を読んでいた。そして、ひとりつぶやく。

「ナツ…童貞卒業おめでとう」

ナツ、とは今読んでいる本の主人公の名前だろうか。ともかくにも、男の子は心の中でこの本の主人公に向けて静かに拍手を送った。ちなみにこの男の子は、別に読書家なのではない。今のブームが読書だけであって、根っからの本を愛してやまない性分なのではないのだ。そのところ、お間違えなく。

「内田ー！おはよー！」

本の世界へ旅立っていたねこっ毛に、元氣よく挨拶をしてくる背が高めの女の子がひとり。上手に制服を着こなし、ご自慢の美脚を欲にみれた男子高校生に無自覚に見せ付けながら、「内田」と呼んだねこっ毛の男の子の隣に並んで歩く。ショートカットの髪を揺らして、ねこっ毛の男の子…内田くんの顔を覗き込む。

「おっはっよっ！」

「うん、おはよう」

「何読んでるの？」

「本」

「それは見れば分かるっつもの！中身よ中身！どんな内容なのかって聞いているの」

「…読んでみる？」

やっと本から視線を外した内田くんは隣の美脚女子高生に、読んでいた本を渡した。活字が苦手らしい彼女だが、興味本位でその場でパラパラと本をめくっていく。…しばしの沈黙。美脚少女の顔がみるみる内に赤くなっていくのを、内田くんはぼんやりと見つめる。

「どう？なかなかおもしろいでしょ」

「あ…朝からなんてモン読んでんだボケエツ！」

内田くんの後頭部を掴んだ美脚少女は、そのまま目の前にあった電柱に内田くんの顔を強打させた。なにすんの、と特に驚いた様子もない内田くんは自分の痛めた額よりもさらに真っ赤っかな美脚少女の顔を眠たげな瞳で見つめる。

「なにすんの、はこっちのセリフ。乙女にこんなもの読ませるんじゃない」

「え？乙女？だれ？」

「あたしだよ！」

「へえ。秋にも乙女って感覚があっただなあ」

「しみじみするな！」

美脚少女：秋は、内田くんの胸ぐらをグワツと掴んで顔を真っ赤にさせたまま怒鳴る。二人の足元にぼてん、と落ちた本のブックカバーが風で飛ばされた。赤裸々になった本の表紙には「乱れ髪先生・愛の夏合宿編」といやらしくピンク色で書かれている。内容は言わずもなだらう。

「意外とハマるよ、禁断愛」

「やーめーるー」

「なに朝からじゃれてんの？俺もまーぜーてー！」

内田くんと秋の間に、よきりと割って入ってきた金色短髪の男の子がひとり。左耳にピアスがふたつ、少し大きめのカーディガンを着こなし、ネクタイは無造作にポケットにつっこんである。短髪少

年は、内田くんと秋の肩にどかりと腕を乗せて、さむいな！と白い歯を嫌味なく見せて笑った。

「内田に余計な入れ知恵をしたのはあんたか、佐藤！」

「は？なんの話」

「秋が乙女だつて話」

「うっそ、マジで？秋山に乙女つて感覚が備わっていたとは！」

「握り潰すぞ」

「えっ、どこを！？」

短髪少年：佐藤はテンション高めに秋の怒りを笑い飛ばしながら、足元に落ちていた内田くんの愛読書をひよいと手に持った。興味津々にパラパラとめくり、しばしの沈黙。

「佐藤、鼻血出てる」

「なあ、内田。：案外、イケるもんなんだな：女教師つて」

「いいよな、女教師」

「お前らもう黙れ」

女教師の妄想にふけるばかり二人組の首根っこを掴み、秋は学校の校門へと進む。通りすがりの憧れのサッカー部の先輩に「力持ちなんだな」と爽やかに笑われ、ハートの80パーセントが乙女で構成されている秋は泣きたくなつた。なんであたしがこんな奴らの保護者代わりみたいなことしなくちゃいけないんだ！鼻の奥がツンとした。乙女の悔し涙は秋風に無常にも流されていく。

「内田、このつづき持つてる？」

「持つてない」

「明後日！俺、バイトないから本屋行こうぜ！」

「ラジャー」

「秋山も来るだろ？」

「行かない！」

「大丈夫大丈夫。秋はさびしがり屋だから、絶対ついてくるよ」

「おい内田、幼なじみの分際であたしを語るな。…あながち間違っ
てないけどね！」

「間違つてないのかよ」

「ほらな」

でこぼこな3人組が一気に炭酸がぬけたような弾けた笑顔を見せる、いつもの朝。だけれど、ある女の子との出会いでいつもと少しだけ違う一日になっていくことに無気力少年内田くんはもちろん、佐藤にも秋にも想定できないのであった。

暖房の生温い空気に包まれた教室から、氷河期のような冷たい空気に支配されている廊下に出ようなどとは誰も思わない。

内田くんも例外ではなく、人口密度の高い教室から出ようとはせずに自分の机をこたつのように扱い、背中を丸めて持参してきたみかんの皮をのんびり剥いている真つ最中であつた。その表情はいつになく真剣である。そんな内田くんの向かい側に座つたのは、かわいい花柄のお弁当を持った乙女・秋だ。ご自慢の美脚はこの寒さを乗り切るために体育のジャージに守られている。スカートの下にジャージ状態。クラスの数人の男子生徒が残念そうに舌打ちしていたのを秋は知る由もない。

「内田のお昼、みかんだけ？」

「これはデザート。お弁当は4時間目の現国に平らげたから、もう空っぽ」

「どつりで授業中お弁当くさかつたはずだわ…」

「秋のお腹の音、すげー響いてたよな…乙女なのに」

「お、乙女だつてお腹が空くの！ていうか、聞こえてたんかい！」

「今日の一番のツボ。クリーンヒット」

「ヒットすんなー！」

内田くんは、目の前で恥ずかしそうに地団駄する乙女の口に、先ほど剥いたばかりのみかんを押し込んだ。「…甘い」とたんに静かになる秋。何事もなかったかのようにカバンからふたつ目のみかんを取り出して、剥きはじめる内田くん。完璧に秋の取り扱い注意の心得を熟知している。

「えっ、内田の弁当みかんだけ？ありえねー！」

内田くんの机の上にとっかかりと座ったのは、寒さなんてへっちゃらな顔をしている佐藤である。その両手には購買で勝ち取った戦利品の数々。つまり、大量のパンとおにぎりが抱えられていた。目をまわす佐藤に、「そうそう。みかんだけ」と適当に返事をする内田くん。内田くんは同じ質問に二回も同じ解答はしないのだ。だって、面倒じゃん。本人談である。

佐藤は内田くんの言葉をまんまと信じ、男の子なんだからもっと食べなさい！と自分のお昼ごはんをわけはじめた。

「俺、そっちのカレーパンのほうがいい」

「じゃあ、みかんと交換な！」

「内田、あたしもみかんもう一個ほしい」

「秋、知ってた？みかん食べすぎると手が黄色くなるんだって」

「あげたくないなら、素直にそう言え！」

「あげる」

「くれるんかい！」

秋のプロ並みのツツコミをお得意のスルースキルでなんなく飛び越えた内田くんは、机から一冊の本を取り出した。真っ先に悲鳴をあげたのは、秋だ。どうやら朝の本事件がトラウマになってしまったらしい。しかしよく見ると、本のタイトルは「お空の妖精さんシリーズ」といった、メルヘンなもの。秋はやれやれと立ち上がりかけたお尻を椅子にくっつけ、佐藤は「妖精って！」と大爆笑している。

「ジャンルばらばじゃない」

「あらゆるジャンルの本を読もうと思って」

「それはそれは、素敵な心がけですことおー」

「つーかよ、二週間前までは牛井ブームとか言ってたかったっけ？」

「もう飽きた」

「はやっ！飽きるのははやっ！」

内田くんのブームは定期的にくるころと変わる。あるときは、ゲーム。またあるときは、陶芸。どれも一ヶ月続いた試しがない。彼は極度の飽き性であり、また気まぐれ屋であった。

「こないだまで、牛井屋でバイトしてたじゃん」

「土曜日に辞めてきた」

「だから、早いつて！」

「究極の牛井を極める旅に出ますって言ったら、店長泣いて喜んでくれた」

「店長オオオ！」

「…牛井極めるって言ってた奴がなんで今本を極めようとしてんのよ」

「ブームだから」

ぺらり、と内田くんはページを捲りながら答える。すでに意識が半分以上、妖精の世界へと旅立ちそうになっている内田くんは、「そんなぺらい紙切れ捲るより女の子のスカート捲ったほうが楽しいんじゃないね？」と、小学生思考の提案をする佐藤。秋のチョップが佐藤

の脳天に直撃する。一部始終を見ていたクラスの女子から乙女代表の秋に、拍手が送られた。

「こんな本どこにあったわけ？」

「学校の図書室」

「図書室かあ。じゃあさ、図書室の小人には会えたか？」

「は？」

「小人？」

「そう。図書室の小人」

古典的なたんこぶをぶくりと頭上に出来上がらせて、佐藤は片足を椅子に乗せた。佐藤の話を聞いていたクラスの男子が「それ、俺も知ってる」と手を上げて佐藤の隣に座り込んだ。“図書室の小人”という話題でクラスが一気に騒つきはじめる。

「なにそのいかにも七不思議っぽいかんじ」

「今年の4月に、とある女子生徒が図書室で小学生体型の女の子を目撃したらしい」

「そう…それが全てのはじまりだった…」

「今から回想シーン始まるよ的な話し口調はいいつての」

「ていうか、別に普通じゃない？図書室に身長が低い女の子がいたっただけでしょ？」

「それが普通じゃないんだな！」

いつの間にか、内田さんの周りにはたくさんの人だかりが出来上がっていた。内田さんの中心で佐藤が叫ぶ。映画化は無理そうなタイ

トルである。

「図書室の小人を目撃した人間は運が上がるらしい！」

「ありがちな設定だな……」

「ほんとほんと」

内田くんの呟きに、弁当をつつきながら秋がうんうんと頷く。ノリの悪いふたりの反応がお気に召さなかったのか、嘘じゃねーぞ！と佐藤は口を尖らせる。

「それって、つまり恋愛運とかも上がるってことなのかなあ？」

ひとりの女子生徒の何気ない呟きに、今の今まで興味ゼロだった秋の肩がぴくりと揺れた。恋愛運だと？それはつまり……あたしが田嶋先輩（サッカー部キャプテン）と付き合うフラグが立つということか？

乙女思考マックスの秋は、未来の幸せな自分を妄想して、うふふと頬をとろけさせる。

「図書室の小人！どっからでもかかってこいやあっ！」

「何故バトルモード！？次は誰のターンだ！？」

「誰のターンでもないでしょ」

乙女魂をメラメラと燃え上がらせる秋と、その盛り上がりには便乗し

て騒ぎはじめる佐藤とクラス一同。ただひとり、内田くんを除いて。

「でもよ、小人を見かけた奴はいても触ったり話したりした奴はひとりもないんだよな」

「らしいね。なんでも、話しかけようとしたら逃げちゃうみたいよ」

「図書室中探し回っても、見つからなかったって話だ」

「図書室のどっかに隠れ家でもあるんじゃないの？」

「これは捜査の必要がありそうだな……内田！」

「んー？」

「きみに決めた！」

「…へえ、妖精の世界でも婚活ってあるんだなあ」

「内田、ちよつとは佐藤の話聞いてあげようよ…」

おしくらまんじゅうのようにクラスが和気あいあいと温まりはじめたところ、お昼休み終了の鐘の音がキンコンカンコンと温度差のある学校中に響き渡った。

3 page

幸せを掴み隊(前書き)

小人さんに会いにいきましょう。

窓際の席でずうつと丸まって本を読んでいたねこつ毛がのびのびと背伸びをする頃には、帰り支度を終えた生徒たちが元氣よく教室から飛び出ていく時間帯であった。内田くんが妖精さんシリーズに夢中になっている間に、放課後になっていたらしい。あくびをする内田くんの隣には、苦笑いをする秋とうきうきした様子の佐藤がいた。

「読み終わった？」

「よっし！内田、図書室行くべ！」

読み終わった、とこつくりと頷いた内田くんの首元に秋は自分がついていた桃色マフラーを大雑把にぐるぐると巻き付ける。あたたかくなった首元に、きよんとする内田くん。

「え、くれるの？」

「あげないよ。あんた、見てて寒々しいんだもん。貸してあげる」

「あー、確かに。内田、薄着だもんな」

「ありがとう。…あ、秋のにおいがする」

「ぎゃあああ、嗅ぐな！」

「どれどれ」

「やーめーろー！」

恥ずかしがり屋のげんこつが、内田くんと佐藤の頭に直撃する。「相変わらず仲いいね」と、クラスメートの女の子がくすくす笑いな

がら、秋たちに手を振った。3人の仲良しぶりは、クラス公認である。ただの腐れ縁だもん、と照れ屋な乙女がぶつぶつと呟く隣で、どこからか取り出したインスタントカメラを手に持った佐藤が元氣よく両手をあげた。

「図書室行こうぜ！」

「なんでカメラ？」

「決まってるだろ！小人さんの姿をばつちりと激写するためさ！」

「小人って、なに？」

「ほら、昼休みにこのばかが話してたじゃない」

「…ああ、そういやそんなこともあったな」

「なんだよ、秋山！お前もノリノリだったじゃねえか！先輩との恋を成就させるために…もつと熱くなれよおお」

「暑苦しい！」

暑苦しく詰め寄ってくる佐藤にパンチして、秋はさつさと教室の戸を開けた。短いスカートがふわりと揺れる。

「あたしは、人の力になんか頼らない。自分の力で幸せを掴みとるの」

「秋…かっこいい」

「いやいや、めちゃくちゃ頼ろうとしてたじゃん！なにちょっといいこと言おうとしてんだよ、ずりーよ！」

くるりと振り返った秋は、今日一番かわいい笑顔を腐れ縁の二人に見せた。

「あ、でも、もしも小人の写真撮れたら焼き増ししてあたしにもちようだいね?」

「結局、他人の力に頼る気満々じゃねーか!」

「秋…かつこいい」

「えっ、どこが? ねえ、どこが?」

「じゃあねーまた明日!」

にこやかに去っていく秋の後ろ姿に、うなだれる佐藤とひらひらと手を振る内田くん。

秋の笑顔をたまたま目撃していた男子たちが「やっぱり秋山かわいいよな」「今度俺、遊びに誘ってみよう」「ざけんな、おれが誘う」「いや、俺が誘う」などと、不毛な争いをはじめていた。もちろん、そんなことがあったなんて秋は知る由もないのである。秋の笑顔を見慣れている内田くんと佐藤は、お互い顔を見合わせて頷いた。あいつら不憫だなという意味を込めて。

「さてさて、気を取り直して、図書室に行くとするか!」

「えー佐藤は来なくていいよ、うるさいし」

「いーじゃんいーじゃん!一緒に幸せ掴もうぜ!」

「めんどくさい…」

あまり乗り気ではない内田くんの腕をグイグイと引っ張って、佐藤は意気揚々と教室を出ようとする。

しかし、佐藤の腕をがしりと掴んだ担任の登場により、幸せ計画は中断されることになる。

「どこに行くんだ、佐藤…？」

「げっ、先生…」

「幸せの小人を探しに行くそうです」

「幸せを探しに行く前に、まず自分の成績をなんとかしような、佐藤？」

「いやだあああ！」

「佐藤がんばれー」

「心がこもってねえっ！助けてくれてもいいじゃんかー！」

担任に首根っこを掴まれ、職員室へと引き摺られていく佐藤に、棒読みの声援を送りつつひらひらと手を振る内田くんは表情はランランと輝いていた。

のろのろと歩き始める彼の行く先は、もちろん小人さんが生息しているかもしれない図書室。「薄情者才才才！」という佐藤の叫び声を完全にシャットダウンして、内田くんは友情よりマイブームを優先させるのだった。

“ 出会いとは運命であり、運命とは必然である ”

図書室の扉には、いつも謎の貼り紙がでかどかどか貼ってある。クレヨンでカラフルに書かれた“ 運命 ” の文字を眠たげな眼で見つめるのは、今まさに図書室の扉を開けようとしている内田くんである。

「 いいにおい 」

クレヨンの独特の香りに魅了されながらも、ゆっくりと図書室へ足を踏み入れた。オレンジの光で照らされた本棚にぼんやりとした影がかかっている。人気がない図書室に、内田くんの鼻歌とぺたぺたと底がすり減った靴の音が響く。

「 ひよっ！ 」

のらりくらりと歩く上機嫌な内田くんの耳に、不意に聞こえてきた謎の奇声。半分しか開いていない瞳をぱちぱちとまばたきさせて、声がした本棚の裏側を覗いてみた。

たくさん積み上げられた本を両手に抱えてあぶなげにふらふらと歩く後ろ姿があった。

身長150センチぐらいのおかつぱ頭の女の子が、高い本棚に不器用に腕を伸ばして分厚い本をいれていく奇妙な光景。内田くんは思った。もしかして図書室に住む妖精さんではないかと。明らかに先程読み終えたばかりの「お空の妖精さんシリーズ」の影響を受けまくっている。

「お手伝いしましょうか？」

内田くんの声に、妖精さん（仮）は小さなからだをびくりと震わせ、抱えていた本を豪快に落とした。まさか自分以外に人がいるとは思っていなかったようだ。女の子は腰が抜けたのかぺたんとして床に尻餅をついた。

「大丈夫？」

震える女の子と同じ視線になるように、からだを屈めてのんびりと尋ねる。首元にボンボンが付いた真っ白なマフラーをぐるぐる巻いている女の子はまたびくりと肩を揺らして、おそろおそろ内田くんの顔を見上げた。短い前髪から覗く大きな黒目がうるうる潤んでいる。

二人の周りに散らばった本を見渡して内田くんがあくびをしながら、のらりと立ち上がった。女の子が怯えた眼差しを内田くんに向けている。

女の子の視線に気付いた内田くんは、よれよれのカーディガンから

見え隠れする手のひらを女の子の頭の上にポンポンと乗せて、ゆるりと笑ってみせた。

「大丈夫、待ってて」

ぼかんとする女の子の横に、内田くんは次々と本をピラミッドのように積み上げていく。女の子の足下に落ちていた本を手にとって、「はい」と女の子の膝の上にはんと乗せた。

「俺も、この本好き」

本のタイトルは「妖精さんシリーズ」だった。座り込んだままの女の子の頭を撫でながら、内田くんはふんわりと笑う。女の子のまあるい瞳がきらきらと揺れた。内田くんの笑う顔が瞳いっぱい映っている。

「はい、立てる？」

「…」

「そんな慌てなくても大丈夫だよ。ゆっくりでいいと思う」

内田くんの手を借りて立ち上がった女の子は、内田くんの言葉に目を見開いた。そして、ゆっくりと目の前にいるねこっ毛の男の子を見上げる。じっと見つめ合ったあと、女の子は慌てて頭をぺこりと下げて、スカートをぎゅうっと小さな手で握り締める。どきどきと

心臓が鳴り続けて、止まない。

「じゃあね、妖精さん」

もう一度、女の子の頭に手を乗せてから、内田くんはのたのたと図書室を後にする。そんな内田くんの後ろ姿を、ひとり取り残された女の子はどこか恍惚とした表情で見つめていたのだった。

「出会いは運命で、運命は必然……」

図書室の扉の貼り紙の言葉を思い出す。女の子は噛み締めるように呟いた。まるで、カラフルな“運命”の文字をなぞるように。

すみれ色の空の下、チヨコレート色のリュックを背負いながらとてとてと歩く小さな女の子がひとり。

なにかと目立つかわいらしいおかつぱ頭を揺らしながら、女の子はずっと左胸を両手で押さえながらぼんやりとどこか遠くのほうを見つめていた。物憂げなため息は白く、どこか甘い空気を含んでいる。前を見て歩いているように全く見えていなかった女の子は、前方から走ってくるやんちゃな男子高校生たちの存在に気が付かなかった。

案の定ぶつかり、女の子はぽてんと弾き飛ばされる。黒タイツからはじんわりと赤い血がにじんできているというのに、相も変わらず女の子は左胸を押さえたままポヤーツとして動かない。女の子とは反対にぶつかった男の子たちはあたふたとしている。

「ばっか、お前何やってんだよ！」

「うわ、すいません！大丈夫ですか！？どっか痛いところあります

！？」

「心臓が…いたい…」

「しっ心臓！？」

商店街の往来での騒ぎを聞きつけて、女の子の周りに人が集まってきた。男子高校生たちはなんとかして女の子を立たせようと四苦八苦している。しかし、女の子はやはりぺたりと地面に足をつけたまま動かない。

その騒ぎを、遠巻きで見つめる長身で目付きが悪い学ランの男の子がひとり。

学ラン少年は、騒ぎの中心にいる女の子を見つけた瞬間、つり目をカッと見開いてズンズンと大股で歩きはじめる。人ごみを掻き分けて、女の子の腕をグイグイ引っ張っている男子高校生の肩をみしりと力強く掴んだ。男子高校生がギギギと首を機械のように動かして振り向く。

「てめえ…あいつに何したんだよ…」

「ヒイツ！」

学ラン少年の人相の悪さに、顔面蒼白になる男子高校生たち。学ラン少年は、怯える男の子のひとりの胸ぐらを掴む。

「答える。あいつに何した」

「ち…ちが…ただ…ぶつかっただけで…」

「ぶつかっただと…？ハアア！？」

「ぎゃー！ごめんなさいごめんなさい！」

「しかもよく見りゃ、あいつケガしてんじゃねえか！血も出てるしよオ…！どつ落とし前つけるつもりだコラア！」

ぴきりと青筋を立てて低く唸る学ラン少年の顔はまるでどこぞの任

侠映画に出てくる悪人面である。完全に腰を抜かした男子高校生たちは、ごめんなさいすいません！と泣き叫びながら、ぴゅーっと風のような早さで走り去っていった。

学ラン少年は、ちっと舌打ちをひとつして、この騒ぎの原因であるおかつぱ頭の女の子に近づく。

「おい、ハル。大丈夫か？」

未だに、ボヤーツとしている女の子の頬つぺたをぺちぺちと軽く叩く。ハル、と呼ばれた女の子はとろんとした瞳を学ラン少年に向けた。

「き……？」

「そうだよ、きだよイチ！お前何絡まれてんだよ、ばか！」

「ん？」

「あーもう！いいから立て！」

イチ、と呼ばれた学ラン少年はグイツとハルの腕を引っ張って立たせた。よろめくハルの膝元を見つめて、舌打ちをもうひとつ。あいつら殺す、と物騒なセリフを並べながら。

ハルはスカートをパンパンとはたいてから、イライラしているきの手を握って、帰ろっかと言。おう、と素直に頷くき。「小さい女の子が不良を手懐けたぞ」「すげえ」と、コソコソと話す野次馬。はたからみたら、不良男子が小学生体型の女子を誘拐しているような図に見えるかもしれないが、

「姉弟で帰るのってなんだか久しぶりだねえ、壱」
「あー…そうかもな」

実はこの二人、血の繋がった姉弟である。

隣でぼんやりと危なっかしく歩く姉をちらりと見て、心配性な弟は深いため息をつきながら繋がれた手にぎゅっと力をこめたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9615o/>

カメとハル

2011年10月8日03時35分発行